

自分の役割を達成し 商品を消費者の元へ



Mitsuo Emoto

【プロフィール】
1949年生まれ、岡山県出身。72年大塚化学(株)入社。77年大塚食品(株)へ移籍、研究所、開発部、生産技術部、市場開発部、マーケティング部、生産技術本部に勤務。2014年に大塚食品(株)退社後、日本食品技術(株)設立。専門は栄養製品、経腸栄養剤(医薬品)、流動食、レトルト食品、冷凍食品。ISO 9001・ISO 22000審査員補。ワインアドバイザー(一般社団法人日本ソムリエ協会)。11年より食品技術士センター会長。

今回、巻頭言という雑誌の初めの「イチ」のページにおいて、雑誌全般を認識し見渡して発言するという経験をさせていただいた。この中で、立ち「位置」(ポジション)の確認を重視してきたが、今に至ってもその重要性をあらためて感じる。いわゆる座標軸を固めていると、自身の考えや行動がぶれたとき、元に戻るのが容易である。長年所属した企業のトップには、「半歩先までなら容易に戻るが、一歩以上出ると元に戻れない」と教えられた。

工場では商品を、決められた数量、決められた人数で、規格通りに作る事が求められる。そこでは生産効率を高める工夫は求められるが、規格を逸脱する改良は求められない。食品工場で生産に従事する立場に限定しても、最初の一品の完成から、工場生産を経て、消費者の元に届けることへの喜びを感じるのには、自分の役割を100%達成して責任を果たしたときであろう。工場の業務を担当したときは、「商品」という完成品を手取る消費者の笑顔をイメ



ージして、日々尽力していた。

既述のように、これまでに商品をイチから作り上げ、市場で消費者の認知を得てキヤッシュフローを確立し、会社の経営、そして社会へ貢献するという貴重な経験をすることができた。また、所属企業のトップから「何のために会社に来ているか」を意識するよう指導され、「最初の一品を作るのが研究所」と言われて尽力してきた。

同時に、食品企業を技術的にコンサルティングする組織を通じて、国内にとどまらず、世界の食品技術に貢献するための流れとシステムの一部を確立できたと考えている。現在の事象について、時間軸と世界への視野を拡大することで、個人の意識改革ができる実感している。

技術者としての生き様は「生涯現役エンジニア」(田辺康雄(技術士)提唱)である。子どもがチョウを追いかけて見知らぬ土地で迷い途方に暮れるように、新しい技術を生涯にわたって追い求めて社会に貢献できるエンジニアでいたい。